チベット　聖なる山　カイラスでの約束

矢野正明

上海を経て、昆明を隊員 10 名で、四輪駆動車で出発したのは 2006 年 5 月 21 日であった。
その 1 週間前に、入院している友人のＮ君を見舞いに行った。
彼は喉頭がん発生から８年が経過していたが、ついに、医者から見離されたと朗らかに打ち明け、元気そうに振舞った姿がかえって痛々しく、私にはチベット辺境紀行で、聖なる山カイラスに立寄り、祈るくらいのことしか出来なかった。
わが隊は大理から麗江までの雲南省の見学を終え、順調なスタートとなったが、その後は途中の橋が数日後には通れなくなり、12 日間待たされるという緊急情報が入った。
急遽、深夜に発進し、桃源郷と言われるシャングリアをほとんど見ることなく、日本海外登山遠征史上最大の遭難者を出した梅里雪山を横目で見ながら、ひたすら、メコン河源流にある落差 4000m の世界一の渓谷など、中腹の山道を、昼夜を問わず、ひたすら走った。
狭い難路には防護柵はなく、離合もままならず、所々、崩壊し、ガケ崩れを起こしていた。
峠では凍結した雪道となり、また、道は所々でなくなっており、岩や砂山を乗越え、濁流を水につかりながら渡った。

強行軍の中でも、紺碧の空に新雪に輝く山々のパノラマ、渓谷美などに、しばし時間を忘れたが、すぐに現実に戻り、あわただしい出発となった。
問題の橋に到着したのは通行止めの数時間前で、今にも落ちそうな橋を 1 台ずつ最徐行で通過した。
この頃には、隊員の多くが、環境の変化について行けず、疲労により、下痢と食欲不振に陥っていた。
隊員の１人は高山病で、緊急入院し、危険な状態になり、急遽、帰国していった。
残りの隊員は州都ラサで休養とポタラ寺院など見学した後に、西チベットに向かった。
はじめはホテルらしきものもあったが、その先は時折、チベット族の食堂や安宿があるだけで、砂礫地、草原、山岳地で、ほとんど標高 4000m を下ることはなかった。

途中、人民解放軍(公安)のチェックを何回も受け、そのたびに、パスポートと写真をまじまじと見られ、緊張する。
チベット自治区入域、入山には5種類の許可書を必要とした。
ラサとシガツェ以外は未開放地区で、個人や一般人は立入ることの出来ない地区である。
トヨタのランドクルーザーも何度となく故障を繰返しながら、5219m のマイムラ峠を越えて、我々が目指すカイラス山の登山基地タルチェンの部落にやってきた。
ラサを出て、チベット特有の茶色の禿山が連なる悪路をひたすら走って5日目。
四輪駆動に乗ってからは実に17日が経っていた。

カイラス(6656m)は未踏峰の山で、ヒンズー教徒10億人を始め、チベット仏教徒、ラマ教徒などが信仰するアジアの究極の聖なる山と言われている。
6月8日にリーダーと隊員3名に中国人の四駆ガイドにポーター同行で8時10分に出発。
最初の7ｋｍは自動車でも行けるので、ランクルに乗らないかと誘われたが、私はあくまで、全区間踏破することに固執し辞退する。
ここで、体調不良で断念した者を除いて、後続組はランクルで来ることになっていた。
落ち合い場所で待つが、四駆組は見当たらず、やむなく、リーダーの指示で、我々3人の隊員は先に行ったと見られる彼らを追いかけることにする。
カイラス山一周52ｋｍの巡礼をゆっくりした歩調で、[黄金峡]と呼ばれる美しい谷を通り、本日の宿舎地であるディラプール・コンバに到着。

後続組を探すが、見つからず、その内に、リーダーも登ってくるが、同行してないので彼らが行方不明になったと騒然となる。
リーダーは疲労困憊で自分のミスに、顔も青ざめている中、ガイドが急遽下山していく。
我々の慌てようとは無関係に、カイラス山はいつものように、山と山との間に、デンと構え、水晶かダイヤモンドのように少し青みを帯びて白く透き通ったように輝いていた。
やがて、夕陽が岩と雪面を黄金色に染め、あたかも巨大な金塊のようで、とりわけカイラス北面は神々しい顔のように見え、何かを語るように私を見下ろしている。
あまりの美しさに言葉を失った。

これが多数の信者が崇める聖なる山だとよく理解できた。
輝く山と裏腹に、四駆組のことを思うと心が痛み、やがて回りも暗闇に包まれた。
翌日、数日前に降った雪が谷あいには積もり、凍てついた小川を何回も渡った。
本日より、リーダーもガイドもいなかったが、我々は山には多少自信を持っていた。
やがて色とりどりの衣類や靴が散乱している異様な風景の鳥葬場にやってきた。
死者を鳥に食べさすために、再度、人骨まで斧で粉々にすると聞いていたので、できるだけ鳥葬場を見ないように足を早めた。
そこを過ぎると、石ころだらけの賽の河原のような歩きにくい道が続いた。
同僚の足取りが遅くなり、歩いているのと休んでいるのと同じくらいになり、焦ったが、その内、私も峠直下ではへばった。
そういった状況で、巡行の最高地点 5650m のドルマ峠にはようやく 13 時に到着。
食欲不振のため、小量のビスケットと熱い紅茶を胃に流し込んだ後、ポーターに手伝ってもらい、「N 君　回復祈願」と書いたタルチョ(チベット語で書かれた呪文入りの 5 色の旗)を氷結した足元の上に掲げた。

日本語のタルチョはどこにも見当たらず、日本人も我々以外に、ラサを出てから、また、この後も長らく、出会わなかった。
約束を守った安堵感か、急な坂道を足速のポーターを追い、駆けるように下りていく。
そこは、空気が平地の半分しかなく、高山病のことなどすっかり忘れてドンドンと 2 人の隊員との距離が離れていき、平地のテント場で大休止となった。
ここからは川を橋がないので、何回も飛び越え、草地や砂礫地の緩い坂を下り、やがて土が露出し、ホコリに悩まされ、体力を消耗して、脱水状態からか吐気をもよおす。
苦しい、これが高山病の症状かと駆けるように下りたことをひどく反省する。
病室でのＮ君の苦しみをほんのわずかでも味わった気がした。
本日の宿泊地のズルフク・コンパに 19 時に到着。
あいにく、満室で、食堂兼居間で寝ることになり、その夜は 12 時までチベット人が入れ替わり立ち代り食事とおしゃべりで、シュラフにもぐりこんだが、眠れなく、夕食もつくらず、水分だけを補給した。
翌日、ズルフク・コンパの仏様に無事を感謝して、深い渓谷に沿って、昼頃にはタルチェンの部落に戻ることが出来た。
部落はどこも満室で、50ｋｍほど離れた人家まで残留組と戻り、遅くに、行方不明の後発組も四輪駆動車で帰着した。
彼らはひどく疲れていたが、久しぶりに全員集合したことを喜び合った。
翌日の６月 11 日はタルチェンに戻り、年１度のサガタワ祭を見に出かけた。
信者と見物人の大観衆の中で繰り広げられる一大ページェントを見て、次のステージ　チョモランマのベースキャンプに向かった。

最後は国境のヒマラヤ山脈を越え、１カ月にわたる 5400km の苦しい四輪駆動のバックパック辺境紀行が終わった。

そして、政情不安を予想していたネパール、カトマンズに入り、翌日、解散となった。
隊員は次々と、バンコック経由で帰国して行った。
私は１人、ネパールで１週間を過ごし、デイリーに飛んだが、あまりの暑さにインド旅行は断念した。
帰国して、病気のＮ君のことが気になり、しばらく経った７月６日に、I先輩に電話をかけた。
先輩の話によると、Ｎ君は病状が安定し、退院して、自宅療養しており、入院時よりも元気である旨、聞き、ホッとする。
スケッチに色付けも出来、彼の為、ドルマ峠で掲げたタルチョの写真を持って、見舞いに行こうと思っている矢先の七夕の日に彼からハガキをもらった。
ハガキには現地からの見舞いのお礼と、「1 日も早く回復し、矢野先輩をはじめ、皆にお会いしたいと思います。
中国の高山の峠を越えて、巡行にいかれるパワーに心より感動し、私もこの元気を少しでも吸収できればと思います。まずはお礼まで。　草々　」と言う文面だった。
「　」内は原文のままで、少し文字は乱れていたが、毎年司会と世話役をつとめていた彼が９月末の同窓会に今年も出てくるように感じ、なんとなくうれしく思った。
そのハガキを受け取った３日後の 10 日の朝に悲しい知らせが入った。
ドルマ峠で掲げたタルチョの写真が彼の元に届いたのは葬儀の直前であった。
私は深い悲しみと無念さで、どっと疲れが出た。
二度とチベットへは行くまいと思った。